

2018年8月12日

陳 述 書

氏名 石 川 学

住所 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 4階
早稲田リーガルコモンズ法律事務所気付

1 生い立ち

私は、1958（昭和33）年に東京都大田区で4人兄弟の末っ子として生まれました。兄弟は、10歳上の1番目の兄、7歳上の姉、4歳上の2番目の兄、そして私です。父は在日朝鮮人1世、母は日本人でした。

小学校は東京朝鮮第六小中級学校に入学しましたが、その時まで自分が朝鮮人だとは知りませんでした。両親は私が小学2年生の頃に離婚しましたが、1番目の兄と姉は自立していましたので、私と2番目の兄が父に引き取られました。しかし、子どもたちを残して父がふらっといなくなってしまうことが時折ありました。私が中学校に上がる頃にも、父は1週間ほどいなくなっしまいました。当時、一緒に住んでいた2番目の兄はグレていて、家に戻って来ていませんでした。中学校の制服もなく学校に行くことができないでいた私を姉が見かねて、寄宿舎のある栃木県の朝鮮小中級学校に転校することになりました。

2 北朝鮮へ行くことになった経緯

私が栃木県の朝鮮小中級学校に在学していた時、1番目の兄が罪を犯して退去強制になることになってしまいました。当時は、朝鮮籍の人が退去強制になる時には、行き先を韓国にするか北朝鮮にするか選ぶことができました。1番目の兄は、父の出身地が韓国領内であったため、韓国に行こうと考えていたようですが、姉が日本を出て行くなら絶対に北朝鮮に行くべきだと主張しました。姉は当時、朝鮮総連系の朝鮮新報社に勤務しており、北朝鮮の宣伝を心から信じて、北朝鮮を素晴らしい国だと信じていました。当時はすでに、北朝鮮に行った親戚がいる人などから北朝鮮の状況は良くないようだという情報も多少入って来ていましたが、姉は、そのようなことはあるわけがないと鼻で笑っていました。北朝鮮の一般の家庭にクーラーがないわけがない、と姉が言っていたのを覚えています。

私自身も、朝鮮学校で北朝鮮は素晴らしい国だという教育を受け、そう信じていました。朝鮮学校では、「金日成元帥様の幼少時代」「金日成元帥様の革命活動」

などが教科や教材になっていました。また、「ふるさと」を題材にした「日語」の作文の授業において、自分たちのふるさは生まれたところではなく、父親の生まれたところ、朝鮮だと教えられました。朝鮮にはいったこともないので、自分はふるさとのない人間なんだ、と思ったのを覚えています。

北朝鮮に行くことになったと告げた時、親戚が北朝鮮に行っていたのだと思いますが、友人の1人から止められました。しかし、当時の私は北朝鮮は素晴らしい国だということを疑っていませんでしたし、美濃部都知事が訪朝して、北朝鮮は豊かだ、平壤は公園の中の都市だ、と褒めたたえていたので、北朝鮮は豊かに違いがないと思って、気にも留めませんでした。

姉は当時朝鮮新報社の寮に住んでいましたが、寮の人たちから「セイコーの時計」を持って行くようにと言われていました。その頃、北朝鮮に行った人々からよく物資を送って欲しいと連絡があったようで、特にセイコーの時計が所望されていたので、寮の人たちはそのようなアドバイスをしてくれたのだと思います。しかし、姉は、「日本で作れる物が北朝鮮で作れないはずがない」、「仮に、日本にあるものが北朝鮮にないなら、私が自分で作る」などと答えて、アドバイスに従いませんでした。

私も、近所のおばさんたちに、ポリエステルやナイロンの生地、ネッカチーフ、セイコーの時計を買って行くようにと勧められました。しかし、私も北朝鮮は豊かだと信じていましたので、「もし本当に北朝鮮が豊かでないとしても、自分たちだけ良い思いをするようなことはできない。楽をするために北朝鮮に行くわけではない」などと言って断りました。そんな私を見かねたおばさんたちは、セイコーの時計10個をプレゼントしてくれました。そこまでしてくれたのももらった時計は北朝鮮に持って行きましたが、のちに本当に役に立ちました。

3 北朝鮮への渡航

そのような経緯を経て、1番上の兄と姉と私の3名は、1972（昭和47）

年、北朝鮮へ渡りました。私は中学3年生でした。両親と2番目の兄は、私たちとは一緒には行かず日本に残りました。

船に乗るまではそこまで深刻に考えていませんでしたが、船に乗って金日成將軍の歌が流れた時に、自分はもう日本に帰ってこられないのではないかという実感が湧いて、本当に怖くなったことを覚えています。

母は、いつもとても身綺麗にしている人なのですが、新潟港で船に乗っている私たちの方に着物がぐちゃぐちゃにはだけているような状態で何かを叫びながら前へ前へと進んで来ました。そんな母の姿を見て、自分は重大なことをしてしまっているかもしれない、と怖くなりました。

母はその後、北朝鮮訪問団として2度私たちに会いに来てくれました。私たちが北朝鮮に渡らざるを得なくなった状況を作ったことに自分にも責任があると感じていたようで、「親として罪を犯した」と謝っていました。離婚してきちんと育てられなかったという罪の意識があったのだと思います。

4 招待所での1ヶ月

北朝鮮の清津（チョンジン）の港についてすぐに、北朝鮮は自分が思っていたのと全然違うということがわかりました。幹部こそ、港から乗用車に乗って行きましたが、その他の人々はバスに乗せられました。バスはチェコ製だったと記憶していますが、日本ではどんな田舎にも走っていないような本当にボロボロのバスで、このようなバスに乗ったら壊れるのではないか、というような状態でした。私はこのことにショックを受けましたが、後になって考えてみると、北朝鮮ではそのようなバスにも一般の人は乗る機会がありません。私は牛車が実際に使われているのを初めて見て、とにかく大変なところに来てしまったと思いました。

私たちの乗った帰国船では200世帯ほどがいました。各地の受け入れ世帯数は決まっていたようで、招待所では、その200世帯のうち、どの世帯をどこに送るかを決め、配置の準備がされていました。通常1ヶ月以内に行われたようですが、

私たち兄弟は40日ほど招待所に滞在しました。招待所では肉が2日に1回くらい、卵もあるような食事が出されていましたが、何か変な匂いがしました。何が臭いのかわかりませんでしたが、兄の話では、日本の少年院や刑務所の食事と同じような匂いだったそうです。それでも、配置されてから考えると、招待所は天国のように思えました。

5 配置後の生活

招待所での40日ほどを経た後、私たち3人は両江道という中国国境の白頭山のある地域に配置されました。ここは本当に寒い地域で、冬はマイナス30度から45度くらいまで下がります。冬が長く、大飢饉になる前は白菜が凍る10月初旬までに1年分のキムチを漬けないといけませんでした。私たちは鴨緑江の上流で流れが早いところにいましたが、12月には鴨緑江が完全に凍りつき、3月に雪が溶け始め、5月か6月頃に完全に雪解けするという気候でした。

私は、耳、手の指、足の指、全部凍傷になったことがあります。耳は、防寒帽子をかぶっていましたが、歩いていると汗をかくので少し緩めたところ、風が吹いて耳が凍ってしまいました。手の指は、素手で薪を掴んだ時に凍ってしまい、足の指は、軍事訓練中に靴下も靴も履いていましたが凍ってしまいました。現地では、指が凍ったら急に温めると良くないので、雪の中に入れるようにとされています。耳が凍った時はそのことをよくわかっておらず、大変なことになりました。耳が凍った瞬間、パキッという音を聞いたような気がして、凍ったことがわかりました。暖かいところに入った途端、耳がジリジリして水がポタポタと垂れて来ました。それから皮はべろっと剥げ、グジョグジョの状態になりました。その後、耳が何倍もの大きさに腫れて、数日間は戻りませんでした。

配置後は、肉や卵などは一般の配給ではなく、配給所で働いている人に頼んで裏からもらわない限り手に入れることはできませんでした。セイコーの腕時計などと物々交換の配給品の横流しです。最初はそういうことができなかつたため、食う

ものも食えず、衛生的にも良くなく、気候も合わなかったため、3人揃って大腸炎にかかってしまいました。便は血だらけで、与えられた薬を飲んでも全く効きませんでした。日本から持って来たセイコーの時計を売り、労働党幹部が使うような薬を買って、なんとか持ち直すことができました。胃や肝臓の病気にもなり、未だに後遺症に苦しんでいます。

兄は、自分のせいで妹と弟が北朝鮮に来ることになってしまい、2人に申し訳ないと泣いていました。

6 学校及び就職

配置された後、私は高等中学校に入学しました。その後、1974（昭和49）年に高等機械学校に入学し、2年ほどで卒業しました。

1976（昭和51）年に卒業後は、機械設計の仕事に就き、3年ほど勤務しました。

1979（昭和54）年からは機械工場で働くようになり、13年ほど勤務しました。ここでは、14時間労働、16時間労働などが普通で、とても辛い職場でした。この間、帰国者は差別を受けなかなか信用されませんでした。朝鮮労働党員という選ばれし者の一員になれば良くなると信じ、18時間労働などにも耐えて必死で努力しました。その結果、1984（昭和59）年に入党することができました。

1995（平成7）年からは、水道暖房事業所というところで勤務しました。

大飢饉の頃は、仕事をしていても配給もありませんでしたので、自分たちで闇取引の商売をして何とか収入を得ていました。

7 結婚

機械工場で働いていた1981（昭和56）年、同じ工場で働いていた妻と出会い、結婚しました。妻は帰国者ではなく現地出身者で、いわゆる恋愛結婚でした。

妻の家族はまだ北朝鮮にいますので、妻の名前を出すことは控えます。帰国者は帰国者と結婚しなければならないということが言われていましたが、そういうプレッシャーに反発を覚えて、自分は自分の結婚したい人と結婚するんだ、と思っていました。妻の家族も当然結婚には反対でしたが、労働党の秘書が妻の実家に行って「必ず入党させるから結婚させてほしい」と説得してくれましたし、私も、「祖国に来てまで日本から来た人たちとだけ暮らせというのはおかしいではないか、何のために祖国に来たというのか」と話し、何とか妻の家族を説得することができました。

その後、1983（昭和58）年に長男が、1985（昭和60）年に次男が生まれました。妻は仕事を辞めて子育てをしていましたが、1992（平成4）年頃からは闇市で商売をして生計を助けていました。

8 姉

姉は、日本で朝鮮大学校への推薦をもらっていたものの経済的事情により進学することができず、朝鮮新報社で勤務していました。当時日本では、北朝鮮ではどんな人でも、男でも女でもおじいさんでもおばあさんでも、学校に通いたい人は通えるという宣伝がされていました。実際に、おじいさんが大学の卒業証明書をもって喜んでいる写真が朝鮮画報に載っていたりもしていました。そのため、北朝鮮の宣伝を信じていた姉は、北朝鮮へ渡って金日成総合大学に入学するのだと意気込んでいました。しかし、招待所で年齢を聞かれ、22歳と答えると、「もうその歳では女の子は大学は無理」と言われました。これが姉にとっての最初の大きなショックでした。

姉は、期待していた北朝鮮と現実があまりにも違ったショックが原因で、北朝鮮に着いて間もなくして明らかに精神的におかしくなっていました。兄との衝突も多くなりました。ある時姉が書いていた大学ノートを見つけて中を見たところ、「自分の兄は本当の兄ではなく、本当はスパイである」とか「毎晩自分を犯す」など、全く事実ではないことがたくさん書かれていました。精神的な病気による被害

妄想に取り憑かれていたのだと思います。その時点で精神病院に入院させた方がいいという話もありましたが、兄と私は結婚前の女性を精神病院送りにするということが躊躇もあり、3年ほど自宅で生活していました。しかし、あまりにも症状が酷くなり、職場が姉を精神病院に送ってしまいました。

その後姉は入退院を繰り返していましたが、1度かなり良くなった時に結婚しました。しかし、子どもを妊娠中に病気が悪化してしまい、出産を待たずに離婚されてしまいました。姉が産んだ娘、私の姪は、孤児院に入れられました。姪が4歳の時に私が引き取ることになり、12歳まで自分の子のように思いながら育てていました。12歳からは兄が引き取り、学校の寄宿舎に入りました。しかし、私のところに戻って来て、もう一度ここに住まわせてほしいと言いました。私は、兄が面倒を見るという私と兄の約束があるので勝手に引き取る訳にはいかない、兄に許可をもらってくるように、と言って姪を兄のところに戻しました。しかし、姪は兄のところには帰らず、途中でのたれ死んでしまいました。この時のことは、今でも思い出すのがとても辛いです。

精神病院に入院すると「公民証」が剥奪され、国民の数に入らなくなります。配給が全くない訳ではないのかもしれませんが、精神病院は原則として自足自給でした。姉が亡くなった頃には、すでに食糧難が悪化していましたので、自給自足の畑も病院外の人に荒らされたりしていました。

私は、あまりお見舞いには行けていませんでした。行くと、姉と一緒に自宅に帰らせてほしいと懇願され、断りきれずに連れてくることになるのが目に見えていたからです。私の家には自分の子ども2人の他に姪と父もいて、とても姉の面倒まで見れるような経済状態ではありませんでした。

姉は、1991（平成3）年に入院先で死亡しました。医師からは病気が悪化したことが原因と聞かされましたが、姉の症状は現実と想像が混乱してしまうものであり、悪化しても死ぬようなものではありませんでしたので、おそらく栄養失調で亡くなったのではないかと思います。連絡をもらってから訪ねたところ、お墓と

いうところに連れて行かれましたが、病院の裏山の中で土がちょっとこんもりしているだけでした。

9 父

父は、私たち3人が北朝鮮に来た時には一緒にはきませんでした。しかし、1987（昭和62）年に北朝鮮訪問団の1人として北朝鮮にやって来て、そのまま日本に帰らずに残りました。朝鮮総連には北朝鮮に骨を埋めたいと話をしており、当時すでに帰国船はなかったため訪問団の一員として来ることになったということです。

父も、北朝鮮に来た当初、食べ物が口に合わず苦勞しました。例えば、自家製味噌を作っていたのですが、それが臭くとても食べられないと言っていました。私は、そのうちこの匂いを嗅ぐと食欲が湧くようになるよ、と言って笑いましたが、本当にその通りになりました。また、地方の方ではまだまだ浴場もなく、1ヶ月間入浴しないなども当たり前でしたので、人々の体臭が臭くてたまらないと父は言っていました。

父は、しばらく私たち家族と一緒に暮らしました。その間はとても元気でしたが、1992（平成4）年に、兄と暮らすようになって半年ほどで死亡しました。

10 保衛部の監視

帰国者は現地の人たちにとってみると部外者であり、少数者でとても弱い立場でしたので、しっかりしていないといつ何があるかわからないという状況で、毎日毎日緊張していました。実際、私も帰国後10年間ほどは保衛部に監視をされていました。監視されていることには気づいていましたが、10年間の監視が終わった後、ある保衛部員が酒の席で「実はお前たちを10年くらい監視していたぞ」と教えてくれました。その時、「今は監視が終わったから安心していいけれど、ちゃんとしていないと今後も何があるかわからないぞ」などと言われました。

また、大飢饉の頃には、餓死する人が大勢いるような状況でしたが、私も冷蔵庫などの生活必需品を含む家財道具など売れるものは全て売って食いつないでいました。本当に子どもを連れて自殺しようかと思っただけくらい、貧しく厳しい生活をしていました。ある時、中国から来た女性が持って来た荷物を売るという仕事を手伝って少しでも収入を得ようと考えたところ、その女性が人身売買のブローカーもしていたようで、その女性の国内担当のブローカーと間違われて保衛部に捕まってしまうました。夜9時頃に捕まり、明け方まで5人の保衛部員から殴る蹴るの暴行を受け本当に大変な思いをしました。最初はなぜ捕まったのか全然わからなかったのですが、1人の保衛部員が「お前は人身売買をしているから良い暮らしをしているんだろう」とぼろりと言ったので、自分が人身売買を疑われているのだとわかったという次第です。私は全く良い暮らしなどしていませんでしたし、その保衛部員に私たちの近所が構成している人民班の人たちに私たちの暮らしぶりを聞くようお願いしたところ、実際に聞いてくれて、私たちが大変苦しい生活をしていて人身売買などしているはずもないということを知っていただきました。暴行を受けて大変でしたが、もしも暴行に負けて自白をしていたら長い間収容所暮らしになっていたと思います。

帰国者は、あることないこと濡れ衣を着せられて、保衛部に捕まえられることも多くありました。

1.1 脱北の決意

脱北を決意した理由を端的に言うと、大飢饉が起きて目の前で大人も子どももどんどん餓死していく中で自分と家族の身を守るためです。国民が何百万人も餓死している中、北朝鮮政府は国民を餓死させないように努力することもなく、ミサイルなどに無駄なお金を使っていました。国が守ってくれないなら、自分の身は自分で守るしかないと思い、脱北することにしました。

この頃は、親が子を育てられずに子どもを捨てて逃げるような状態でした。子

どもは、市場で食べ物を盗んだり、知らない街に行って食べ物を探したりしていました。私の住んでいた街は国境付近でしたので、人が多く集まっていました。街中には、餓死した遺体がゴロゴロとあるような状態でした。あまりに餓死する人が多いので、各工場の周りにはその工場の職員が処理するように言われるようになりました。処理するというのは、遺体を山に持って行き、穴を掘り、金を出し合って棺桶を入手し、埋めるということです。それぞれの工場でもあまりにも数が多いので手に負えず、若い人たちが夜中に自分の工場のそばにある遺体を蹴って転がしたり金具を引っ掛けて引っ張ったりしながら、他のところに移動させて押し付けあったり、鴨緑江に落としたりしていました。行政は機能していませんでした。

大飢饉が起きて、真面目で北朝鮮政府に忠実な人たちから餓死していったと思います。死ぬ瞬間まで、金正日がなんとかしてくれるだろうと信じ、「金正日同志万歳」と言って死んでいきました。私の知り合いでも生き残った人たちは、自分の働いている工場からモーターを盗んで銅線を中国で売り、食べ物を買って商売したりしていました。ある時期にはもう工場のモーターが全然なくなってしまうほどです。私は、そのようなことはどうしてもできなかったため、生まれ育った日本に戻ろうと思いました。

特に脱北の決意を強くしたのは、目の前で幼い子どもが餓死するのを見た時でした。その日は、闇市の仕事をするために出かけて、駅のところで子どもが動けないで座っている様子を見ました。その時は、何かおかしい感じはしましたが、まさか死ぬとは思っていませんでしたから、そのまま通りました。用事を済ませて帰りに同じ場所を通りかかった時、その子がいたところに人が集まっていて、覗くとその子が倒れていました。粗末なパンを握って、笑みを浮かべて死んでいました。食べ物ももらってホッとして死んでしまったのだと思います。この子を助けられなかったのが心残りです。今でも夢に見たりします。しかし、当時は他人の子を助けていたら自分の子を助けられないような状況でしたので、どうしようもありませんでした。自分の子どもたちも同じことになるのであれば、脱北に失敗して捕まったとし

ても、何もしないよりはマシだと思い、脱北することを決意しました。

1 2 脱北

2001（平成13）年11月、私と兄でまず中国へ向けて国境を超えました。その後、しばらく中国国内に潜伏し、2002（平成14）年9月に日本に渡ってきました。妻と子どもたちは、2006（平成18）年2月に脱北し7月に日本に来ました。私が脱北したことは、少なくともその頃までは北朝鮮政府には知られていなかったようです。餓死する人があまりにも多く、把握できなかったのではないかと考えています。妻の兄弟や親戚は現在も北朝鮮に残っています。

1 3 終わりに

帰国者の中には、保衛部に捕まってしまった人や精神を崩してしまった人が本当に多くいました。私自身がなんとか精神的にも自分を保つことができたのは、布団をかぶってラジオで紅白歌合戦を聞いたり好きだった日本の歌を歌ったり、騙されたという気持ちはありましたが、そうやって日本のことを思い出しながらなんとか気持ちを切り替えて生きることができたからだと思います。

以上